



北京図書館蔵『説文解字讀』識語図影

研究ノート

『段氏説文補正』と『説文解字讀』

高橋 由利子

一

段玉裁の『説文解字注』の草稿と考えられるものの抄本が二種ある。一つは中央研究院歴史語言研究所蔵の『段氏説文補正』であり、もう一つは北京図書館蔵の『説文解字讀』である。前者については筆者が全文のマイクロフィルムにもとづいた概要を、本学会報第一号に発表した⁽¹⁾。そこで後者についても筆者訪中の折に全文のマイクロフィルムを申請したが得られず⁽²⁾、か

わりに館内での閲覧が許された⁽³⁾。この文はその時のノートにもとづく調査結果をまとめたものである。不十分ではあるが『段氏説文補正』と『説文解字讀』および『説文解字注』の三者の關係についての構想を立てるにとちとして、ここに記すものである。なお、以下説明の便のため、『段氏説文補正』を『補正』、『説文解字讀』を『讀』、『説文解字注』を『段注』と略称する。

二

調査は『讀』の中で、『補正』と収録が一致する字⁽⁴⁾について、『讀』と『補正』の内容を比較するという方法を採用した。結果は両者がほぼ同文であるものと、異なるものとに分れたが、異なるものについても、『補正』の文に追加の注を加えたものが『讀』の文となっているものがほとんどであった。このことから筆者は『補正』↓『讀』↓『段注』という成立ルートを考えた。次にその具体例を示す。(標点筆者)

三

(1) 『補正』と『讀』が完全に同文であるもの
98 蔽・99 芾・12 漱・81 咽・22 唢・5 跬・224 夔・95 甬・67 離・113 籌・237 筑・89 葢・13 黠・3 棹・4 棹・238 枅・239 椽・210 桮・211 桮・121 梟・137 邮・138 翳・106 俚。(上の番号は『補正』の中での通し番号。文字は『讀』の中での順——つまり部首順に挙げる。以下同じ。)同文のものは例をあげる必要はないかも知れない

が、『補正』『讀』の内容紹介も兼ねて数例を記す。

98 蔽蔽第小卬也。从卬蔽聲。
99 市蔽第也。从市市聲。

今各本蔽字注蔽蔽小卬也。無第字及注。傳寫脫誤也。按蔽蔽文理不可通。毛詩傳曰蔽蔽小兒。爾雅釋言曰第小也。今據以補正。第或假第爲之。如第祿爾康。毛傳曰第小也是也。毛詩又多假第爲第。113 簞。宋楚謂竹簞曰簞居也。

今各本無曰字。簞居之間誤多以字。攷方言曰簞陳楚宋魏之間謂之簞居。不知何人不達其義妄增一字矣。
237 筑。似箏。五弦樂也。

似箏二字。今各本誤以竹曲三字。依吳郡賦李善注改正。玉篇注所引說文與今誤本同。廣韵引說文以竹爲五弦之樂也。又知曲字不順。而以爲字易之也。

210 楮。手械也。所以告天。从木告聲。
211 槿。足械也。所以質地。从木至聲。

今各本妄刪所以告天。所以質地八字。依周礼釋文所引說文補。楮告同在古音弟三部。槿質同在古音弟十二部。

(2)『補正』での「按」が、『讀』では「玉裁按」である以外、すべて同文のもの。

58 上・57 禮・152 蒨・23 卬・73 肸・103 臆・96 甕・200 嬰・202 鸛・203 躬・37 匡・118 栖。

23 呬。唼呬呬也。从口伊省聲。

今各本作呬。注内作尸聲。按陸德明毛詩韻雅釋文張參五經文字皆曰說文作呬。知今本作呬誤也。以虫部呬字例之。定爲伊省聲。讀如橫彼淮夷之橫。

按魯頌釋文曰。據說文作虎音橫。知今本說文作橫。傳寫之誤也。而王伯厚詩地里攷曰。說文韓詩皆作橫。彼淮夷。又未知其何本。

202 鸛。鳥也。从鳥瞿聲。

按今各本無鸛字。併注七字。今攷埤字注引詩鸛鳴于埤。鳳字注曰鸛類鸛。思知說文本有鸛字。而瞿字注引鸛鳴于埤。爲許氏所見。異詞耳。鸛如鸛而黑尾。今補。

いづれも傍点の「按」を『讀』では「玉裁按」に作る。

(3)『補正』の文と部分的に異同があるが、ほとんど同文で、論旨も一致しているもの。

11 睪・74 嵩・70 胸・232 枹・51 枹・52 枹・53 欄・217 栢・153 梧・135 鄒・36 鄒・32 鄒（以上は一宇から数字のちがい）。100 荊・123 必・190 函・241 讀・155 譌・214 誰・46 廠・50 翟・112 瞶・38 簞・229 磬・230 磬・231 磬・120 魼・19 錫・136 郝（以上は半行から数行のちがい）。それぞれ53 欄、100 荊を例に取る。

53 欄。木也。从木蘭聲。今音蘭。

按今本作棟。乃後人妄改也。說文棟字注曰木似欄。知說文本作欄。廣韵二十五寒欄字注云木名。從古本說文也。攷工記以欄爲反宇。正作欄。俗作棟。遂妄改說文爲棟。以欄爲欄。極字矣。

以上は『補正』の文であるが、『讀』では冒頭の「按」を「玉裁按」とするほか、*のあとに「見攷工記釋文」が同じく小さな字で加筆されている。

100 荊。木也。从艸到聲。

按今各本致荊大也。从艸致聲。陟利切。荊木。倒从艸到聲。都盜切。致字廣韵五篇俱不載。荊木。倒不成文理。且說文無倒字。按廣韵所由始一終亥之本。荊字在来字之下。其始荊誤爲致。而荊大也。之注不誤。繼校說文者。增荊字於部末。而又或誤其注耳。廣韵入聲四覺到字。引說文云荊大也。可證。今刪去致字。爾雅荊大也。或譌爲荊。或譌爲到。

以上は『補正』の文であるが、『讀』では傍点「按」を「玉裁按」とするほかに、*1の「耳」の下に「爾雅釋文引說文劉艸大也」があり、また、*2の「薺」は「薺」に作っている。

(4)『補正』の文に大幅な加筆が加えられたり、論旨が訂正されているもの。

213 諡・151 璜・148 琯・134 幽・206 瑤・33 梢。大幅加筆の例として151 璜、論旨訂正の例として33 梢をあげ、あわせて『段注』とも比較する。

151 璜、半璧也、从王黃聲、

半璧也、諸侯泮宮、水如半璧、故曰璜、後人因之製璽字、

『補正』では以上の簡単な注がついているだけであるが『讀』では以下の文が加わる。

當言半璧謂之璜、周官經大宗伯以玄璜禮北方、鄭注半璧曰璜、象冬閉藏、土上無物、唯天半見、高誘注淮南子曰半璧曰璜、玉裁按大戴禮佩玉下有雙璜、皆半規、規似璜而小、古者天子辟廱、築土雝水之外、圜如璧、四方來觀者均也、諸侯泮宮、泮之言半也、半水者、蓋東西門以南通水、北無也、鄭君箋詩云爾、然則辟廱似璧、泮宮似璜、此璽字之所由製歟、釋文音黃、

この璜の字は『段注』では次の如くである。

璜、半璧也、

鄭注周禮、高注淮南同、按大戴禮、佩玉下有雙璜、皆半規、似璜而小、古者天子辟廱、築土雝水之外、圜如璧、諸侯泮宮、泮之言半也、蓋東西門以南通水、北無也、鄭君箋詩云爾、然則辟廱似璧、泮宮似璜、此璽字之所由製歟、

从王黃聲

尸光切十部、

『讀』と『段注』を比較すると、典拠、論理ともにまったく一致しているが、『讀』では典拠となる引用文を長くそのまま引用しているのに対して、『段注』では段玉裁自身の論理の展開に必要な部分以外はすべて削り、凝縮された簡潔な表現になっている。対応文を表にすると次のようになる。

| 讀 | 段注 |
|--|-------------------------|
| <p>當言半璧謂之璜。 周官經大宗伯「以玄璜禮北方」 鄭注「半璧曰璜、象冬閉藏、土上無物、唯天半見」 高誘注淮南子曰「半璧曰璜」</p> | <p>鄭注周禮、 高注淮南同。</p> |

つまり、『補正』から『讀』へは詳細化、『讀』から『段注』へは凝縮化がなされていると言える。
次に論旨訂正の例としての梢を見てゆこう。

33 植、木參交、以枝炊、莫者也、从木省聲、讀若驪、駕為駢之駢、

今各本作讀若驪、駕傳寫脫誤也、按漢書平帝紀、詔劉歆、定婚禮、禮娶親迎、立輅併馬、服虔曰、立輅、小車也、併馬、驪駕也、驪之言、驪馬二馬也、說文駢字注云、駕二馬也、駕二馬為驪、驪駕為駢、漢書作併、說文駢一也、駢、今音入一先、古音在第十一部、併聲省聲、同部、故植讀如駢、徐鉉不知驪、駕之說、今參攷補為駢之駢四字、

以上が『補正』の文である。ここでは、説解の「讀若驪駕」を「讀若驪駕為駢之駢」と補うことを主張し、そうしてこそ、植と駢が同じ十一部どうしの讀若の關係となるとする。ところが『讀』では次のようになってゐる。

植、木參交、以枝炊、莫者也、从木省聲、讀若驪、駕、漢書平帝紀、詔劉歆、定婚禮、禮娶親迎、立輅併馬、服虔曰、立輅、小車也、併馬、驪駕也、五載按驪之言、驪也、驪馬二馬也、說文駢字注云、駕二馬也、駕二馬為驪、驪此當云讀若驪、駕、集韻五寘、杜樵、植三形、同斯義、切引方言、俎几、西南蜀漢之交、曰杜、驪聲、在支部、省聲、而讀若驪者、支清互通、如虞、切蒲、猛、炷、切口、迴、是其理也、集韻讀若賜、此相傳古音、必有所受之驪、賜同部而音近也、鼎臣但云所、校切而驪、駕之云、不可通矣、又按植讀賜、如明堂位、秋省之省、讀猶一也、猶古音徒、

ここでは冒頭の引用文は『補正』とほとんど同じであるが、「讀若驪駕」は「讀若驪駕之驪」と云うべきとし、植と驪の音の關係に注目する。そして集韻の反切の例を引き、植が省声であるのに驪の若く讀むというのは支韻（驪）と清韻（植）が相通じるからだとし、他の例もあげてその説を補強する。

つまり『補正』では説解に新たな字（駢）をつけ加えて、十一部どうしの讀若關係であるとするのに対し、『讀』では、一

応説解の中にある字（驪）を用いて、十一部（↑清韻）と十六部（↑支韻）合韻の讀若關係であるとするのである。それでは『段注』ではどのように書かれているだろうか？次に『段注』を見てみよう。

植、木參交、以枝炊、莫者也、
支各本作枝、今依集韻類篇正、竹部曰、莫、漉米數也、數、炊莫也、莫、數二字為一物、謂米既漸將炊而漉之、令乾、又以三交之木、支此莫、則漉乾尤易也、三交之木是為植、
從木省聲、
所、綆切、十一部、

讀若驪、駕、
漢平帝紀、禮娶親迎、立輅併馬、服虔曰、立輅、立乘小車也、併馬、驪馬也、按驪之言、驪也、駢下云、駕二馬也、駕二馬為驪、驪、讀若驪、駕之驪、此讀支二部合韻也、按玉篇曰、杜、樵、三同思、讀切、肉几也、集韻說同、考方言曰、俎几也、西南蜀漢之交、曰杜、音賜、後漢書、樂松、家貧為郎、常獨直臺上、無被、枕杜、是則肉几、應作杜、杜、支莫、應作植、不知何以合之、而亦可以證十一部合韻之理也、

『段注』の論理は清韻と支韻の二部の合韻とする点でまったく『讀』と同じである。以下『讀』と「讀若驪駕」の『段注』を對比する。

| 讀 | 段注 |
|---|---------------|
| 漢書平帝紀「詔劉歆、雜定婚禮、禮娶親迎、立輅併馬」服虔曰「立乘小車也、併馬驪駕也」 | （傍点部省略。外は同文。） |

玉裁按驪之言麗也、麗馬二馬也。說文駢字注①云「賀二馬也」、賀二馬爲麗駕、此當云②讀若驪賀之驪。*

(傍点部省略。)
傍線①駢下、傍線②楫(に作る外は同文。)
此清支二部合韵也が*の箇所に來る。

集韵五眞杜樵三形同、斯義切、引方言「西南蜀漢之交曰杜」。驪麗聲、在支部、省聲讀若驪者、支清互通、如麤切蒲猛、挂切口迴、是其理也。
集韻讀若賜、此相傳古音必有所受之、驪賜同部而音近也、鼎臣但云「所緩切」而驪賀之云不可通矣。
又按楫讀賜、如明堂位「秋省」之省讀彌一也、彌古音徒。

按玉篇曰「杜楫樵三同思潰切、肉几也」集韵說同。考方言曰「俎几也、西南蜀漢之郊曰杜、音賜」後漢書「樂嵒家貧爲郎、常獨直臺上、無被、枕杜」、是則肉几應作杜樵、支夔應作楫、不知何以合之、而亦可以證十一・十六部合韵之理也。

以上、比較すると、『讀』ではすべての資料を楫の音を検討するという点からのみ用いているのに対し、『段注』では杜・樵と、楫の意味のちがいについても考えを及ぼしている点に論の深まりが見られる。

(5)『補正』の文のあとに、同じ字についての注釈が項を改めて並列されているもの。

97 郎・201 沙・194 粉・195 牂・196 羯・156 箇・119 號・125 輟・124 梅・54 曩・122 臬・85 圜・139 邛・108 偃・109 佺。

曩を例にとる。

今各本注内疑字上無曩字、依玉篇補。

以上が『補正』の文である。が『讀』の文はこれと同じ文のあとに、項を改めて同じ字についての異なる注釈が並記される。次に示す。

曩衆盛也、从木鳥聲、逸同書曰曩疑沮事、今各本注内疑字上無曩字、依玉篇補。
曩衆盛也、从木鳥聲、逸同書曰曩疑沮事、今各本注内疑字上無曩字、依玉篇補。
逸同書者、漢志同書七十一篇注云周史記正也、同書曰之下各本脫曩字、今依玉篇引說文補、今同書文酌解、七事、三聚疑沮事、曩作聚、闕其音讀也、曩衆聚義通、見馬部、曹憲音音幽、必幽二反、聚古音讀如聚、然則曩聲之歸古音在尤、侯部、是以古今移轉、形殊音近、今說文及玉篇廣韵音所臻切、蓋許守蓋闕之義、無讀若之云、後乃妄爲穿鑿、以其字形類聚、義又略同、故以衆音爲曩音、非實也。

以上が『讀』の全文である。

『讀』の第一項目の注はまったく『補正』と同文で、説解の字を補うものである。

第二項目は、逸周書について触れた後に、第一項目と同じことを表現を変えて述べている。その次に曩の字の音についての議論を展開している。つまり、今の周書が曩を聚と作っていることや、曩の反切が香幽・必幽であることから、古音では尤侯部に属していた。ところが、今の説文(大徐・小徐等の諸本)や玉篇等の反切はそれとはまったくちがう所臻切に作っている。これは許慎がもともと「讀若」等の音を示す注をつけてい

なかったために、後人が、𩇑と字の作りや意味の似ている𩇑の字の音をこじつけたためとする。

『段注』では𩇑は、次のようである。

𩇑聚盛也

𩇑部曰𩇑見𩇑與𩇑同意三馬三火皆盛意也

从木𩇑聲

𩇑見馬部唐韵甫虬切曹憲廣雅音曰香幽必幽二反廣韵甫休切

又音標然則𩇑音當在三部明矣而鉉云所臻切篇韵皆同與許云

𩇑聲者不合蓋𩇑屬會意𩇑屬形聲而皆訓盛𩇑讀若莘莘征夫之

莘因強同之耳

逸周書曰𩇑疑沮事

各本脫𩇑字今依玉篇補周書文酌解七事三聚疑沮事聚古讀如

驟與𩇑音近疑沮事猶云苦疑敗謀也各本此下有闕字者淺人

不解周書語妄增也

ここでの論旨はまったく『讀』と同じである。ただ、『讀』の前半部が『段注』では説解の後半部「逸周書曰𩇑疑沮事」の注と対応し、『讀』の後半部が『段注』前半部の「从木𩇑聲」の注と対応している。次にその部分を対比する。

| 讀 | 段注 |
|--------------------------------|--------------|
| 逸周書者、漢志「周書七十一篇」注云「周史記」是也。 | (無) |
| 周書曰之下各本脫𩇑字、今依玉篇引說文補。 | (傍点部省略) |
| 今周書、文酌解、「七事、三・聚疑沮事」、𩇑作聚、闕其音讀也、 | ①聚古讀如驟與𩇑音近。 |
| | 𩇑疑沮事猶云苦疑敗謀也。 |
| | 各本此下有闕字者、淺人 |

『段氏說文補正』と『說文解字讀』

案𩇑聚義通①

𩇑見馬部*1曹憲*2音、香幽・必

幽二反。*3聚古音讀如驟。②

然則𩇑聲之𩇑、古音在尤侯部。③是以古今移轉、形殊音近。

今說文及玉篇廣韵音所臻切。蓋許守蓋闕之義、無讀若之云。後乃妄爲穿鑿、以其字形類𩇑、義又略同、古以𩇑音爲𩇑音。非實也。

不解周書語妄增也。

*1唐韵甫虬切

*2廣雅

*3廣韵甫休切又音標

②①點線部分へ。

③𩇑音當在三部明矣。

而鉉云所臻切、篇韵皆同、與許云𩇑聲者不合。蓋𩇑屬會意、𩇑屬形聲而皆訓盛。𩇑讀若莘莘征夫之莘、因強同之耳。

説解冒頭の逸周書については、『段注』はここでは注がないが、他の箇所(八篇上・僉)で、「逸周書者、謂漢志七十一篇之周書也」と、『讀』と同様の注が加えてある。

その他、廣韵の反切については訂正があり、また、『讀』ではふれていない「𩇑疑沮事」の意味についても注を加えている。さらに、『段注』では、注を「从木𩇑聲」と「逸周書曰𩇑疑沮事」の二つに分けて整理していることも、注の明確化に貢献している。

注

(1)「中央研究院歷史語言研究所藏『段氏說文補正』について」。なお、『說文解字讀』についても、この中の

注7の最後に少しふれてある。

『段氏説文補正』については、『販書偶記』卷四小學類説文之屬に段氏説文補正無卷數校正水經學古編附があり、金壇段玉裁撰、底藁本と記されている。また、卷十六別集類の經韻樓集十二卷のところにも餘未刊者、段氏説文補正、附校正、水經、學古編、見稿本、と注記されている。

(2) 中山時子教授を団長とする「老舍著作愛好者訪中団」

(一九八二年三月二十六日から四月五日)に参加した。

(3) 巻頭の図影は一九八〇八月、筆者が北京図書館より入手した表紙より序にいたる九枚のマイクロフィルムの

うちの一つ。なお、この『説文解字讀』については、静岡大学の阿辻哲次氏の「北京図書館藏段玉裁『説文解字讀』初探」(日本中國學會報第三十三集)にくわしい考察がある。

(4) 一九八二年四月二日午前八時半から十一時半および午後一時半から五時まで。なおこの閲覧許可を得るに際し、汎アジア文化交流センターの森住和弘理事長、広岡純理事と中国人民対外友好協会の許瑞宗氏に多大な援助を受けた。記して謝意を表す。

(5) 『説文解字讀』は第七冊と、第九冊から第十五冊までが欠けているため、『段氏説文補正』と比較可能な字は全部で百四字。そのうち八十四字が収録一致字であった。可能字中の九字は時間切れのため未検証のまま

残った。いずれ機会を見てこれらについても調べたい。

(6) 第一項目の注が、疊のように完全に『補正』の文と一致するもの(臬・號)、一部異同のあるもの(郎・園・梅・輟・鹵・紛・牂・邛)がある。また疊の例からもわかるように、第一項目の説解にあたる部分と、第二項目のそれとは、第二項目の注に依じて、多少異なることもある。圈に到っては、親字のみで、次に第二項目、および第三項目の注が加えられている。なお莎・邛では『補正』の文が第二項目の位置にある。